特集　衣裳の世界

ダンサーを華麗に彩る
海外バレエ団の衣裳 大研究！

構成・文：藤井由乃
イラスト：真蛸ちさ

憧れのダンサーの華麗な舞いを彩る、美しい衣裳たち。海外のダンサーの衣裳は、どこか違って見えます。とにかくすてき！　でもなぜすてきなのでしょうか？　そんな素朴な疑問をひもといていきましょう。

衣装の個性――お国柄を反映

ボリショイ・バレエ、マリインスキー劇場バレエ、ロイヤル・バレエ、パリ・オペラ座……。それぞれのバレエ団には、歴史と文化によって培われた独特の個性があります。それはダンスのスタイルだけでなく、バレエの衣裳にも色濃く息づいています。ここでは、『ドン・キホーテ』第3幕、キトリの衣裳で、ロシア、ロイヤル、オペラ座を比べ、個々の衣装の「すてき」を探してみましょう。

衣装のスタイル

ロシア系バレエ団の特徴は、踊りやすさ、機能性に重点を置いているところです。ボディには軽いストレッチの生地を使っていて、衣裳が動きを妨げることがありません。ニーナ・アナニアシヴィリの衣裳のボディはベロアですが、他にもライクラというストレッチのきいた生地や、もっと薄いレオタードのような生地の場合もあります。たとえば、マリインスキーの『眠れる森の美女』の妖精たちの衣裳は、筋肉の動きが見えるほど薄く、身体にフィットしています。また、美しい脚さばき見せるため、スカートは短く、ピンと立っています。美しいプロポーションと高いテクニックを誇るロシアならではです。

ロシア系のキトリ

一方、ヨーロッパ系バレエ団の特徴は、女性らしい美しさの表現。身体のラインをきれいに見せるため、ボディにはボーン（bone）と呼ばれる細いワイヤーが入っています。そして、スカートは、ロシアとは対照的にふわりと垂れ下がっています。まるでコルセットとドレスです。ヨーロッパでは、ドレス文化を背景に、バレエの衣裳もひとつのドレスだと捉えられているのでしょう。

色遣い

ニーナの衣裳は赤と黒。はっきりした色を使い、シンプルにして歯切れの良い美しさを表現するのが、ロシアの衣裳です。『ドン・キホーテ』を初演したプティパは、バレエを見せる芸術として高めた人物。彼の手法は、〝ストーリー〟という糸に、キラキラ輝く〝ダンス〟の宝石を通してネックレスを創りあげるというものでした。つまり主役はダンス。『ドン・キホーテ』の主題は若いスペインの若者の恋ですが、本当の主題は、スペイン情緒のある小粋なダンスなのです。このことから、プティパの伝統を守るロシアでは、いかにもスペインらしい真紅の衣裳が好まれるのかもしれません。

反対にロイヤル・バレエは、結婚式というストーリーを重視して、白い衣裳を採用しています。ダイアナ妃を思わせる、英国らしい上品なオフホワイトの総レース。スカートは濃淡のぼかし染めになっています。あいまいな色、違素材をうまく利用して、穏やかで重厚な雰囲気を醸し出すのはロイヤル独特の妙技。ロンドンでは、20世紀の始めになっても、ヴィクトリア王朝時代の保守的モラルのため、女性の脚を見せるバレエは政府の保護を受けていませんでした。そのような保守的な気風が、荘厳で気品のあるロイヤル・スタイルを作っているのです。

ロイヤル・バレエのキトリ

パリ・オペラ座のキトリ

オペラ座（ヌレエフ版）の衣裳は、明るいベージュに黒・茶色・金のブレードが大胆に走り、そこにたくさんのピンクのリボンが飾られています。パステルカラーはオペラ座の得意色。シャープなデザインに、かわいらしさ、甘さを上手に加えるのがパリのおしゃれ心なのでしょう。

デコレーション

ニーナの衣裳の胸元とスカートには、繊細な金の刺繍が施されています。ロシアは刺繍の技術がとても高く、衣裳部には刺繍専門のスタッフがいるほどです。刺繍の他、金や銀のはっきりした形のモチーフを大胆に飾るのもロシア的

といえます。

キトリは娘なので宝石の装飾がありませんが、ロイヤルのおとぎ話の姫の衣裳は、装飾がとても豪華で、照明による光り方が上品で幻想的です。舞台装置や照明の効果が計算し尽くされているためでしょう。控えめで端正なダンス・スタイルに合った、ノーブルな味わいのデコレーションといえます。オペラ座では、キトリのリボンの他、オーロラ姫の衣裳にふわっと咲く小花のように、かわいらしいアイテムが特徴的です。

衣装へのとりくみ——念入りな時代考証

ロシアやヨーロッパのバレエを観に行くと、その舞台装置と衣裳が織り成す別世界に、まず圧倒されてしまいます。海外のバレエ団では、衣裳デザイナーが舞台装置デザイナーを兼任することが多く、また、兼任ではない場合にも、入念な話し合いによって作品創りは進んでいきます。振付、衣裳、舞台装置が融合しているからこそ、あのような統一感のある別世界が創り出せるのでしょう。

このような舞台創りの過程で、第一に取り組むのが時代考証です。当時どんな服や髪型が流行していたかを調べる作業は、リアリティのある作品をつくるうえで欠かせません。海外のバレエ団の衣裳は、主役のみならず、小姓から式典長、貴族まで、それぞれの作品の時代に合ったものが作られています。ここでは、マリインスキーの『眠れる森の美女』、ロイヤルの『マノン』を例に、男性の衣裳の違いを見てみましょう。

チャイコフスキーは、『眠れる森の美女』を作曲する際、一方では17世紀、ルイ14世時代の宮廷バレエ作曲家リュリ、他方では18世紀のオペラ作曲家ラモーに曲想を求めました。そのため、1幕は17世紀、100年の眠りから覚めた2、3幕は18世紀に設定されているようです。

1幕、国王の髪型はカールのかかった長いかつら、服装は、白いタイツにヒールの靴、紋章の入った分厚いガウンです。これはルイ14世の肖像画にそっくりです。そして、4人の王子の衣裳は、17世紀前半に流行した騎士風スタイルです。特徴は、大きなえり、付け髭、長く垂らされた髪に羽根飾りつきの派手な帽子、飾り刀、そして長靴です。童話「長靴をはいた猫」からもわかるように、当時長靴は騎士の身分を象徴するものでした。

これに対して、2幕から登場するデジレ王子の服装は18世紀的です。髪を後ろにまとめて黒い袋に入れ、うなじで閉じる髪型は18世紀から19世紀に流行したものですし、首に巻かれた黒いリボン、美しい金の装飾の衣装はロココ風です。また、オペラ座の3幕のように、髪の色を白くするのも18世紀の流行のひとつです。バレエの華やかな印象とはうらはらに、年齢や汚れをごまかすための、少々不潔なものでした。

さらに、ロココ時代をよく表しているのが、『マノン』に登場するムッシューG.M.の衣裳です。鮮やかな色彩、美しい刺繍、豪華なレース、おしゃれポイントだったボタンなどが、ロココの粋な男たちを仕上げる必須アイテムでした。

マリインスキー版『眠れる森の美女』
第1幕より4人の王子

マリインスキー版『眠れる森の美女』
第1幕より国王

マリインスキー版『眠れる森の美女』
第3幕よりデジレ王子

英国ロイヤル・バレエ版『マノン』より
ムッシュG.M.

ムッシューG.M.の衣裳には、それらがふんだんに盛りこまれています。イギリスは、シェイクスピアを生んだ演劇の国。「マノン」という文学世界、洗練されたロココの時代をみごとに再現しています。

衣裳を観る醍醐味——デザイナーに注目

衣裳デザイナーは、演目・演出ごとにテーマをもってデザインしています。また、デザイナーの中には、金属的な美しさを得意とするデザイナーもいれば、幻想的な世界を作り出すのが得意なデザイナーもいます。デザイナーの狙いやテーマを探ったり、同じ作品の、デザイナーによる違いを楽しむのも、衣裳を観る醍醐味のひとつです。

さらに、有名デザイナーによる衣裳も見所に。海外では、有名なファッションデザイナーがバレエの衣裳を手がけるのは、珍しいことではありません。ラクロワの衣裳で話題になったオペラ座の『ジュエルズ』は記憶に新しいところですが、他にもフォーサイスとイッセイ・ミヤケ(『失われた委曲』)、ベジャールとベルサーチ(『バレエ・フォー・ライフ』)、ボリショイ・バレエとジバンシー(『ジゼル』)、オペラ座と森英恵(『シンデレラ』)など、たくさんのコラボレーションが行われています。話題性はもちろんですが、現代的なモード感覚が持ちこまれれば、作品世界の新たな広がりが期待できるでしょう。

しかし、このような動きは今に始まったことではありません。20世紀初頭、バレエ・リュスでは、ピカソやコクトー、サティ、など、前衛的な芸術家たちが結集して数々の作品をつくっています。1924年には、ニジンスカの『青汽車』の衣裳を、あのシャネルがデザインしています。バレエはもともと、多方面の技術や才能を結集させる総合芸術なのです。

日本人デザイナーが外国で活躍するのは喜ばしいことですが、日本のバレエ団へのデザイン例が少ないのはなんだか寂しい気もします。日本人だからこそ、日本の振付家とも通い合えるはず。ぜひとも今後このような動きが活発になって、いつかは前衛的な日本人の振付家、デザイナー、画家や作曲家の力を結集し、日本独自のバレエで世界をびっくりさせる日を期待したいものです。

・・・

バレエ衣裳は、歴史と文化によって培われたひとつの芸術であり、高い技術による職人の技であり、そしてファッションです。海外のバレエ団の衣裳の「すてき」の理由は、それらすべてのレベルの高さにあるのでしょう。今度劇場に足を運ぶ時は、ぜひ衣裳にも注目して、バレエをもっともっと楽しんでください。

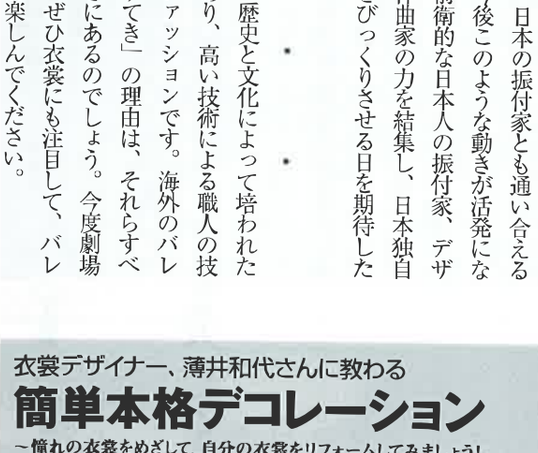
衣裳デザイナー、薄井和代さんに教わる

簡単本格デコレーション

～憧れの衣裳をめざして、自分の衣裳をリフォームしてみましょう!

材料

①好きなモチーフレース(大きな手芸やさんにはいろいろな種類が置いてあります)
②ラインストーン(貼りつけタイプ)
③スパンコール(お皿型ではなく、平らなもの。金のモチーフなら金のものを選びます)
④ボンド～ラインストーン接着用(Aleene's Platinum Bond Super Fabricがオススメ。クリーニングしても取れません)
⑤ボンド～モチーフレース接着用(河口、手工芸・ビーズ用がおススメ。乾燥後、ミシンで縫うこともできます。このボンドでラインストーンも接着できますが、取れやすいのでお勧めできません)
⑥衣裳と同色のチュール



1 モチーフレースを好きな大きさに切り分けます。

2 大きいモチーフを紙の上に並べ、構図を考えます(写真では、切り離していないモチーフに、1で切り分けたうち左2つを組み合わせています)。

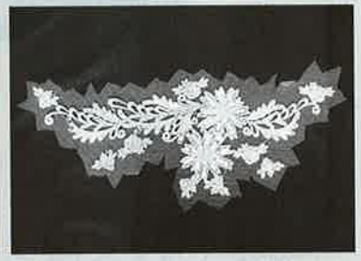
3 小さいモチーフ(小バラ)を加えます。規則的に並べるのではなく、ランダムに「飛ばす」のが成功の秘訣です。

4 構図が決まったら、鉛筆で周りをなぞりましょう。

5 紙の上にチュールを置き、鉛筆の線をガイドに、⑤のボンドでモチーフを貼りつけていきます。

6 いよいよラインストーン、スパンコールの登場です。④のボンドで、凹凸のないところに貼っていきます。ポイントとなる部分にボリュームが出るようにしましょう。写真では、大きなお花の中心と小さい花びら、そして小バラの中心にラインストーンを置いています。また、大きな花びらと、脇にのびる葉っぱの先にスパンコールを並べています。

7 デコレーションが完成しました。



8 形に沿って、チュールをギザギザに切ります。

9 最後に衣裳に縫い付ければ完成!! シンプルな衣裳が豪華に生まれ変わりました。他のチュールの部分にも、小バラやスパンコールを散らすと、さらにゴージャスな仕上がりになります。

ほとんど針を使わずに、こんなすてきなデコレーションができるんですね。皆さんもぜひ挑戦してみてください。